

5月16日(水)から19日(金)に、姉妹校であるフィリピンの St.Paul College Paig 校を会場に行われた国際教育者会議に出席してきた。タイトルには見慣れたようで見慣れない Interculturality と Paulinian という二つの単語が使われている。どちらも造語で、Interculturality という単語は非常に訳し難く、「文化間の結びつき」とでも訳すことができるだろうか。Paulinian という語は「聖パウロに倣うもの」とでも取ればいいのかと思う。国際会議という名が示す通り、参加者はシャルトル聖パウロ修道女会にかかわりを持つフィリピン国内の学校と、日本、タイ、インドネシアからの代表者が出席し、総勢 500 人を超える非常に大きな会議であった。日本からは、盛岡白百合学園中学高等学校、仙台白百合学園中学高等学校、白百合女子大学からの代表者が参加したが、それ以外にも立教大学からサバティカルでフィリピンを研究している先生、白百合女子大で宗教を専門に教えている先生の参加もあった。

会議は Sr. リリア管区長の基調講演から始まった。この講演では“Interculturality”がどのようなものであるかを定義した。それを説明するのに、聖書的基盤、教会、グローバル的状況、条約・因習・契約の観点から「異文化間の結びつき（異なるものの有機的な結びつき）」を示された。例えば本校でもおなじみの話であるが、イエスはユダヤ人のみならず異邦人にも奇跡を行った話は聞いたことがあると思う。まさに、それが Interculturality を示すものである。日本人には分かりにくいかもしれないが、フィリピンは基本的にはカトリックの国であるが、異なる宗教、民族、文化的背景を持つマイノリティも多数存在する。教育とは、そういったマイノリティをマジョリティーに同化させてしまうことではない。一つ一つを尊重しながら、逆にその違いを上手に生かして UNESCO の言う「万人に質の高い教育」を行うことが大切なのである。Sr. リリアは講演の最後に、“Intercultural education”(文化間の教育)に対する問題点も提起された。



この会議では、非常に名誉なことであるが筆者も日本を代表して発表の役割を仰せつかった。発表の要旨は、簡潔に言えば、建学の精神を振り返り、いったい私たちはどのような女性を世に送り出そうとしてきたのかを、これまで行ってきた海外研修、全学年で行ってきた講演会やワークショップを踏まえて紹介した。それに加え、震災をきっかけに生まれた絆、そして SGH が目指そうとする GSL 育成にも触れて、Paulinian spirit が建学の精神を実現するうえでいかに大切であるかを訴えた。実は用意した内容は 20 分程度のものではあったが、発表直前にタイムキーパーがいて時間制限があることを知り、半分程度に圧縮したのでどれだけうまく伝えられたかは自信がない。実際のところ、各代表者はかなり時間をオーバーしていたようだ。全体的にかなり時間が押したこともあり、私よりの後の発表者は発表に使うはずだったビデオを昼食の時間に見ることになるという事態にもなった。

会期中はタイの代表者とテーブルを共にし、意見を交換できた点もよかったと思う。全体的には、プログラムがタイトに組まれており、三日間とも時間が押し気味であった。それだけこのテーマに関しては意見が多くかわされたのだと思う。会議の最後にはこの会議を振り返り、各プログラムの評価も発表された。すべての項目で高評価であった。評価の観点の中には会期中に出された食事も含まれていた。食事の評価は 5 段階評価で 4.1 であったが、そのコメントには「もっと健康的な食事を出して油脂食品を減らしてほしい」などというコメントも寄せられていた。フィリピンでは 5 食が標準で 3 食の間にヘルスブレイクというのがある。実はこのヘルスブレイクが曲者で、おやつだと思っていたら結構しっかり食べるのだ。食帰国後は体重計に乗るのを恐れたほどだった。

会期中は SPC の Sr.ベルナデッタを始め、アガナ校長、多くのシスター方に大変お世話になった。そして何よりも今回の出張を命じてくださった校長先生に感謝したい。



一日目の発表者たちと